



SIGGRAPH Asia 2018 TOKYO



SIGGRAPH Asia 2018、過去最大の参加者を集め、歴史的なコンピュータ・グラフィックスとインタラクティブ技術の「クロスオーバー」を実現

2018年12月4日～7日に東京国際フォーラムで開催された、コンピュータ科学分野の国際学会（ACM）の分科会「シーグラフアジア2018（SIGGRAPH Asia 2018）」運営事務局（ケルンメッセ株式会社）は、11回目の開催となった。本カンファレンスの公式登録者は世界59の国と地域から9,735名で、SIGGRAPH Asia史上最大の登録者を記録したと発表された。

複数日の来場を予定して、フルカンファレンスパスなど通し券を購入した登録者が多数いたことから、会期中は多くの来場者が訪れたと推測される。

開催結果について、運営主催者であるケルンメッセでテクノロジー/デジタルメディア/エンタテインメント及びモビリティ担当地域ディレクターであり、SIGGRAPH Asiaの代表スタッフを務めるPrakash Ramajilluは、次のように述べている。「SIGGRAPH Asiaは、科学、テクノロジー、エンタテインメントの交流を共に祝福する

ために、広範囲な分野から個人のグループが集まるイベントです。一つの会場の中で、さまざまな専門知識が結びつきを生み出すこのイベントは、コラボレーションや混乱、更にはイノベーションを生み出す最高の場所でもあります。私はSIGGRAPH Asiaが東京での開催が決定した当初から、東京は魅力的な場所であり、結果として本開催が最高の結果をもたらしたと言えるでしょう。今年の結果は、2年間にわたるカンファレンス及び東京ローカル・コミティの献身の賜物です。SIGGRAPH Asia 2018は新たなベンチマークを確立したので、私たちは来年の開催をよりインパクトのあるカンファレンスにする為に、一層の努力が必要と考えています」

約750名の発表者が登壇したSIGGRAPH Asia 2018では、産業界における最新の開発動向を始め、コンピューター・グラフィックス並びにインタラクティブ技術の将来に関する議論が行われた。

基調講演

米航空宇宙局（NASA）ジェット推進研究所（JPL）のリード・システム・エンジニアであり、NASAの最新ディスカバ

リー・ミッションである小惑星「プシケ（Psyche）」の金属世界への旅における、エンジニアリング技術の専門家として知られるデヴィッド・オー博士、マサチューセッツ工科大学コンピュータ・サイエンス学科のエリック・ドメイン教授は、アーティスティックな構造を作り出す為の数学の応用を解説する「数学と折り紙」、GROOVE XのCEOを務め、ソフトバンクでのペーパー開発で知られる林要氏は、人間とロボットの関係を探る「次世代の家庭用ロボット」について講演した。

特別講演 (Featured Session)

Pixar Animation Studios, Weta Digital Ltd, ILM Singaporeの各社の制作・特殊効果チームが登壇し、自身が手掛けた映画「ロード・オブ・ザ・リング」や「アベンジャーズ」に登場する、そのリアリティックなバーチャル・ヒューマンからキャラクタ、「スター・ウォーズ」で最も象徴的なキャラクタであるハン・ソロの制作の背景について、その複雑な仕事ぶりを紹介した。

Emerging Technologiesは、一般にインパクトを与える技術革新を追求する研究



カンファレンスチェア 安生健一氏



ポスタープレゼンテーション会場



リアルタイムキャプチャーのデモンストレーション



プレスブリーフィング



映像制作の仕事展、デジタルマップペインターの東城直枝氏ほか出展者が訪れ仕事の内容を説明してくれた。



C4では、リアルタイムアニメーションなどのプレゼンテーションが開かれた



テクニカルブリーフィングの様子



セッション：映像制作現場の舞台裏



ACM SIGGRAPH Academy 殿堂入りした。河口洋一郎氏・(東京大学名誉教授) 主催の酒パーティ。司会進行は、為ヶ谷秀一氏 (女子美術大学)

分野のコミュニティの開発を推進する上で、いかにインタラクティブ技術がより強固な役割を果たしてきたかを示すプレゼンテーションを行い、SIGGRAPH Asia 2018で最も重要な役割を果たしました。Virtual Reality and Augmented Reality (VR/AR) プログラムは、仮想・拡張・ミックスの現実におけるエマージング・メディアと最先端技術的を紹介し、参加者の共感を得ていたセッションは、エマージング・デジタル・メディアやインタラクティブ技術に深く入り込むものでした。Art Galleryは、「クロスオーバー」を体験できる魅惑的な作品であるNam June Paik氏の「Candle TV」(1975)と、Ayako Iwai氏の能面を用いた「萬媚」(1981)をコミュニケーション・システムにおける二つの相互の生き物を表現として取り上げた。

14カ国から93社・団体が出展し、SIGGRAPH Asia 史上最大規模となった機器展示は、最新のハードウェア、ソフトウェア、テクノロジー、イノベーションが紹介された。

主な出展社 (英語表記のアルファベット順) : アストロデザイン、AWS Thinkbox、バンダイ・ナムコ・スタジオ、Binary VR、CLO Virtual Fashion、yberAgent、デルジャパン、デジタルハリウッド大学、ドワンド・メディア・ビレッジ、EEZ Production Studios、フォーラム8、HUAWEI テクノロジーズジャパン、IMAGICA グループ、InstaLOD GmbH、NOITOM、teamLab、Too Corporation、Tsinghua University-Tencent Joint Laboratory、ユニティ・テクノロジー

ズ・ジャパン、VFX-Japan 協会、Visual Computing Center at KAUST、Xsens Technologies、YGGDRAZIL Group、Zero C Seven など

SIGGRAPH Asia 2019 について

SIGGRAPH Asia 2019 は、2019年11月17(日)～20日まで、オーストラリア・ブリスベンで開催されます(会場: Brisbane Convention & Exhibition Centre: BCEC)。

2019カンファレンス・チェアを務めるTomasz Bednarzは、次のように述べています。「オーストラリアでの初開催となるSIGGRAPH Asia 2019 (SA2019)の会場はブリスベンで、地元では「Brissy」と呼ばれています。カンファレンスの開催テーマは、「DREAM ZONE!」です。こ



テクニカルペーパープレゼンテーション



機器展示でのアストロデザインはCT スキャンした心臓の画像を8Kで映し出し、タブレット感覚で動かせるデモを行った。



機器展示会場：IMAGICA グループのブース



リアルタイムアニメーション



名画をVRで見せるデモを行った。



2019年11月開催のブリスベンのブース。カンガルーのポスターやコアラのペンホルダーでアピール



リアルタイムアニメーション



風などを感じるVR



会場を盛り上げる、ボランティアの面々

れは、コンピュータ・グラフィックスやインタラクティブ技術による作品を、完全に革新的な方法で実現することで、その知覚や相互作用を拡張する、不思議な体験をしてみよう事ができる、というものです。SIGGRAPH Asia 2019は、北米で開催されるSIGGRAPHからStudio・プログラムを紹介するほか、アンダーグラウンドのハック・コード・アート・コミュニティによる、制限駆動型のリアルタイム・コンピュータ・グラフィックスから触発された「デモシーン・プログラム (Demoscene Program)」を初めて行う予定です。ぜひ、皆さんもSIGGRAPH Asia 2019の予定をカレンダーに入れて、美しいクィーンズランドにお越しください」

SIGGRAPH Asia 2019に関する詳細情報は、こちらを参照
<http://sa2019.siggraph.org>.

シーグラフアジア 2018 について

2008年から始まったシーグラフアジアの日本での開催は横浜(2009年)、神戸(2015年)に続いて3回目であり、運営事務局では東京開催であることを踏まえ、アジア諸国を中心に世界中からエンジニア、アーティスト、学生の参加を予定しています(会期:2018年12月4日~7日、会場:東京国際フォーラム)。「CROSSOVER(クロスオーバー)」を開催テーマとするシーグラフアジア2018では、コンピュータ・グラフィックス(CG)、バーチャルリアリティ(仮想現実:VR)、拡張現実(AR)、人工知能(AI)といった、最新技術に関する

研究発表が国内外の研究者ならびに企業によって行われるほか、企業や大学によるこれらの技術の実用化に向けた展示デモンストレーション、業界最高クラスのCG/アニメ/映画作品を上映するエレクトロニック・シアターなど国際学会ならではの、最新プログラムが行われます。多くの日本の大学・研究機関が発表を行い、参加者が最先端技術に対する知識を深め、国や地域を越えた人材交流の機会となることが期待されています。

このレポートは、SIGGRAPH Asia 2018 広報担当 河西(かさい)氏によるリリースをもとに作成、写真は現地独自取材によるものを掲載。